

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991300096		
法人名	株式会社 TAKK		
事業所名	認知症高齢者グループホームさくらハウス		
所在地	栃木県那須塩原市高林1931番1		
自己評価作成日	令和2年7月25日	評価結果市町村受理日	令和2年9月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	令和2年8月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>家庭的な雰囲気の中で「笑顔のあふれる暮らし」の理念の下、職員も笑顔で過ごし寄り添うことで、入居者の笑顔を引き出している。平均年齢92.3歳、自立歩行可能な方が少なく日常生活の支援が必要な方ばかりです。グループホーム本来の姿とは少し様変わりしてきましたが、終の棲家としてゆっくりと日々を過ごして頂けるよう、寄り添いながら一人ひとりに合った過ごし方を工夫している。</p>

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>だんだん利用者の言葉が少なくなり思いが聞けなくなっているが、それでも職員は利用者の隣に座り声をかけ、利用者の表情から思いを汲み取る努力をしている。コロナ禍で外出の機会が減っているので、事業所の敷地内を散歩する機会を意識して作っている。限られた状況での暮らしを職員は工夫して支援している。身体拘束・虐待防止会議と研修会の機会を有効に活用し、身体拘束をしないケアの徹底を図っている。会議・研修は、実践につながる取組になっている。看取り体制はとっていないが、利用者の看取りを行った経験はある。家族の希望があれば、かかりつけ医や法人関連の医師の協力を得ながら、自然な形で終末期を迎えられるように、事業所としてできる限りのことをしたいと思っている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念の下、グループホーム独自の理念「笑顔のあふれる暮らし」を共有し、入居者は勿論、我々職員自身も笑顔で過ごせるように実践している。	理念である「笑顔のあふれる暮らし」の実現のため、職員は笑顔で支援をすることを心がけている。職員の笑顔での支援と声掛けによって利用者が不安にならず穏やかな暮らしにつながると管理者は理念の意味を具体的に示している。新人に対しては管理者だけでなく先輩の職員が日々の支援の中で笑顔での支援の大切さ、黙って支援するのではなく安心できるような声掛けの必要性を伝えている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の小学校との交流会や、中・高校生のボランティアサマー・マイチャレンジの受け入れ等実施していたが、新型コロナウイルスの感染予防の為交流等は行っていない。	新型コロナウイルス感染予防として3密を避けること、マスク着用などを利用者に理解してもらうことが困難であり、重症化のリスクが高い高齢者施設であることから外部との接触を最小限にしている。そのため昨年のような地域との交流が持たなくなっている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小学校との交流会や中・高校生ボランティアサマー等で、認知症を有していても会話やレクを楽しめたり昔の知恵を教わることができ、尊敬する大先輩であることを伝えてきた。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	民生委員や自治会長の出席率が高いが、やはり家族の出席には至っていない。	運営推進会議は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い今年3月から直接集まったの協議ができないため、事業所での取組や利用者の様子が載っている「さくらハウス便り」を運営推進会議参加メンバーに届け、書面により意見を出してもらっている。新型コロナウイルス緊急事態宣言が全都道府県に出され、5月25日には解除されたが終息することなく現在に至っている。そのため今後も運営推進会議は書面で意見を出してもらう予定となっている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村との連携はとれている。	新型コロナウイルス感染拡大に伴い、事業所では日々不安の中、手探りの状態で支援している。市からは国や県からの感染予防に関する指導内容・注意事項などが伝えられているが、判断に迷うこともある。感染予防対策や感染者、感染の疑いのある人が出た場合の対応方法など具体的に知りたいが、市からは「そちらの判断でしてください」と言われている。	新型コロナウイルス感染予防対策は、未知の経験の中で事業所が苦悩しながら行っている。域密着型サービスの指定者である市には、新型コロナウイルス感染に関する情報収集や具体的な対応方法をとるにも考える支援機関としての役割を期待したい。	

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3カ月に1度、身体拘束廃止会議を実施し、身体拘束をしないケアを実践している。	身体拘束・虐待防止会議(身体拘束適正化委員会)と研修会の機会を有効に活用し、身体拘束をしないケアの徹底を図っている。会議・研修は、「勤務3年未満の職員と3年以上の職員、それぞれの自己チェックリストを集計、分析し課題を明らかにする。」「不適切なケアの事例を挙げ、その反対の適切なケア内容を検討し、その後ケア内容の再確認をする。」など実践につながる取組になっている。日常的に「スピーチロックとならないか」「利用者が不安となるような声掛けをしていないか」など職員同士で確認しあっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止マニュアルを参考に、身体拘束廃止会議内で虐待についてもミーティングを行い入居者の全身状態を共有し職員間の連携を図り、職員の精神的な変化にも気づけるようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	運営推進会議の議題にも取り上げたり、勉強会の中で学ぶ機会を設けている。今後も積極的に学習していく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明し、不安等への対応も行っている。入居してからも新たに出て来た疑問点に関しても、その都度対応できるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議への家族の参加は少なく、面会時に状況報告をしながら要望等を伺えるように努めている。入居者本人の要望等の確認は中々出来ない状況。	例年なら、家族が面会や通院の付き添いに訪れた時に利用者の生活の様子や体調を伝え、家族の意見や要望を聞き取っていたが、コロナ禍で家族の来所が少なくなっているため、電話をかける機会に要望等を聞くようにしている。職員は、利用者の表情から気持ちを汲み取るように努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員全員で集まれる機会はないが、数人でのミーティングの中でケアに関することや業務に関する話を話している。	管理者は、ミーティングや職員の手の空いた時間に職員と意見交換している。コロナ禍で困難と不安な運営を強いられている中、管理者は新型コロナウイルスの感染が発生した場合の決め事を職員と話し合っている。感染者が入院できない場合も想定して、具体的に居室や共有空間の区分けや使い方も検討している。緊急時に使うガウン等も手作りして準備している。	コロナ禍でも介護サービスを止めることができない事業運営に対して、万が一の場合の対応が現時点では事業所任せである。災害などの緊急対応と同様の支援が施設外から必要である。一事業所で解決できる問題で無いことから指定者の市に働きかけて、支援策を示してもらうことを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個別面談の機会を設け意向の確認をしている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修受講に関して前向きに検討し、働きながら職員同士で学びの機会を設けている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同法人の別事業所との交流を持てるようにしている。			
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人の好みや不快に思う事を確認し過ごしやすくてできる工夫をしている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の困りごとや不安に関して傾聴し、要望に関して出来る限り対応できるよう心掛けている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人とご家族のニーズを見極め対応できるよう他施設への申請やサービスの説明もしている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者それぞれの体力や能力の差はあるが、その方が出来ることを継続できるよう、集団生活では無く、共同生活を送れるようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	可能な限り通院はご家族で行って頂くことでご本人の状態を把握し支える関係の共有を図っている。ご家族が来所時には日頃の様子を報告し毎月の様子をスナップ写真と一緒に送付している。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	身体機能の低下に伴い家族との外出の機会も減っている。新型コロナウイルス感染予防の為小多機能利用者との交流も減っている。	コロナ禍で、地域の馴染みの人が利用している併設の小規模多機能型居宅介護事業所の利用者との交流も減り、家族とのつながりも通院時や月1回位届け物をしてもらう時に姿を見てもらうなどに限られている。施設としては個別に手紙や写真を家族に送って利用者の状態や生活などが変わらないことを知らせている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	その時々々の状況に合わせ、座席の変更をしたり入居者同士で関われる機会を作れるようにしている。			
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院時や他施設への入居当初はご家族の不安もあるため、随時相談等の対応を行う。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思疎通の困難な入居者が多く、出来ることも減っているが、数人でカルタ遊びをすることで文字や絵を認識でき言葉が出やすくなったりしている。	だんだん利用者の言葉が少なくなり思いが聞けなくなっているが、それでも職員は利用者の隣に座り声をかけ、利用者の表情から思いを汲み取る努力をしている。コロナ禍で外出の機会が減っているので、事業所の敷地内を散歩する機会を意識して作っている。限られた状況での暮らしを職員は工夫して支援している。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族やご本人から、生活歴や今までの環境、趣味などの情報を得ている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別ケアを中心に、一人ひとりの一日の流れを把握し、心身状況の変化に対応できるよう努めている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は、日々の申し送りやミーティングで現状や困難事項について話し合い情報を共有しながら作成している。継続的に必要なケアや対応の変更が必要な事柄についても相談しながら実践できている。	前回の外部評価の改善課題とした「利用者の変化が把握しやすく介護計画に連動したモニタリング様式」が検討された。その結果、新たなモニタリング様式が導入され、職員会議やミーティングの中でモニタリングの内容が話し合われ、次回の介護計画に反映させる事項が明確になっている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌、申し送りノートを活用し職員間での情報共有は出来ている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズや状態の変化に伴い、他施設への検討や医療との連携も図れるよう往診の依頼も行っている。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の小学校との交流会や、中・高校生との関り、ボランティアの慰問、蕎麦打ち等を実施し社会交流の機会を設けていたが、新型コロナウイルス感染予防の為交流等は行っていない。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族の協力を得ながらかかりつけ医への受診を行っている。細かい情報が必要な場合は日々の状態を記入し主治医へ情報提供している。家族対応での受診が困難な場合は職員が対応し、通院が難しくなってきた方には往診も依頼している。	利用者の状態を共有できる機会と捉え、かかりつけ医への受診は家族に担ってもらっている。家族が対応出来ない利用者には、有料で職員が受診支援を行っている。受診結果は看護師が責任を持って管理し、業務日誌を通して周知、職員間で共有している。通院が困難となった場合は、状況に応じて訪問診療、往診、訪問看護を利用して対応している。夜間などの緊急時には協力医療機関と連携している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤の看護職員や、医療保険で必要時に来て頂いている訪問看護師に相談し対応している。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には病院関係者との情報交換を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に、重症化したり終末期の意向をご家族に確認し、看取りに関してはまだ完璧に行える状況ではないが数名の方の看取りの経験はあるり、事業所として出来ることを説明している。体力が低下し往診が必要となつて時点で再度意向を確認し、意向に沿って対応している。	入居時に、重症化した場合や終末期に事業所としてできることを家族に説明しており、利用者の状態が大きく変化した時には、その都度家族に状況説明をし支援内容を確認している。看取り体制はとっていないが、利用者の看取りを行った経験はある。家族の希望があれば、かかりつけ医や法人関連の医師の協力を得ながら、自然な形で終末期を迎えられるように、事業所としてできる限りのことをしたいと思っている。また、管理者は看取りケアを実施する職員の心理的負担を受け止める心積もりである。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡体制は整えている。入居者の状態を把握し急変時の対応が出来るよう情報の共有を行い備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を実施している。1回は消防署立会いで行っている。	併設された小規模多機能型居宅介護事業所と合同で年2回、そのうち1回は消防署立ち合いの下、避難訓練を行っている。職員全員が通報、初期消火、一人ひとりの利用者の状態に合わせて避難誘導ができるように努めている。夜間想定避難訓練はしばらく行っていないが、少ない職員でいかに早く避難させるか検討している。	事業所の隣に川があり、台風やゲリラ豪雨等の水害に対応するマニュアルが必要と考えられる。災害時、速やかに避難できるように消防関係者に相談し意見をもらいながら、避難場所、避難経路、利用者の状態に応じた避難方法や要員などを盛り込んだ避難計画を作成して、すべての職員が訓練を行い体験することが望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人を尊重し、その時々表情の変化などに気をつけながら言葉かけや対応を行っている。	利用者がそれぞれに大事に思っているこだわりを理解し、それを傷つけない支援が大切だと考えている。職員は利用者一人ひとりの表情を見ながら、声のかけ方や話し方を変えて対応している。トイレ誘導や入浴時などその人のペースを大事にして、さりげないケアを心掛けている。書類等は鍵のかかる場所に保管し、職員以外の人が見たり持ち出したりしないように管理している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の思いや希望を表現し易いように傾聴しながら言葉を引き出せるように寄り添っている。失語がある方でもこちらから誘導するのではなく、選択せきような言葉かけを行い思いを表現できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、起床時間や就寝時間、排泄の決まりも無く過ごして頂いている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みの服を選んで着たり、2カ月に1度は、事業所に来てくれる理美容の方に散髪してもらっている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事はそれぞれのペースで食べられている。一緒に作業ができる方が減ってはいるが、下膳などをして頂いている。	食事は併設された小規模多機能型居宅介護事業所で作られ、事業所のキッチンで利用者一人ひとりに適した形態にしている。利用者の摂取量や持ちやすさを考えてその人に合った食器を使用している。職員は利用者が一人で食べられることを大切に考えており、誤嚥をしないように声掛けしながら、その人のペースで食べる姿を温かく見守っている。利用者の重度化が進み、調理に参加することは難しくなってきたが、食事の楽しみを五感で感じてもらっている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに適した量を配膳し、栄養バランスも考慮した献立になっている。摂取量や水分量のチェックも行い管理している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	拒否や抵抗がある場合は無理強いせずに出来る限り毎食後口腔ケアを行い、義歯や口腔内の状態を確認している。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握しトイレ誘導している。訴え時には都度対応し、立位が保てない方のみオムツ使用となっている。夜間は、入居者の動きに対応しトイレでの排泄を実施している。	職員は利用者それぞれの排泄パターンやトイレサインを把握しており、声掛け誘導により、トイレでの排泄に繋げている。トイレで排泄したいという利用者の気持ちをできるだけ尊重し、立位が難しい人も職員2人で支援することもある。熟睡している利用者を無理して起こすことがないように、その人の尿量に合わせてバットの大きさを変えて対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取や適度な運動、必要時には便秘薬を使用し排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	午後に入浴の時間を設け、一人の職員が準備、着脱、入浴、髪乾燥まで全て行い、その方に合った時間配分で支援している。	浴室は併設された小規模多機能型居宅介護事業所と共同で使用している。機械浴槽と利用者がまたぎやすいように浴槽壁が上下できる個浴槽が設置されている。広い脱衣場は床暖房になっており、週2、3回午後の時間帯を利用して職員と1対1でゆっくりと入浴したり、体調によってはシャワーや足浴で対応している。事故がないよう細心の注意を払い、入浴時に利用者の体に異変がないか観察している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	部屋の温度や明るさの調整を行い、一人ひとりの就寝のタイミングに合わせている。巡視時には睡眠の妨げにならないように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報を確認し、全職員が把握に努めている。服薬の準備も全職員が責任を持ち行い、症状の変化等への観察も行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	出来る行為が少なくなっている。下膳や食器拭きができる方には一緒に行ってもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	身体的な衰えと共にご家族との外出も機会が減っている。季節毎の外出も計画しているが、なかなか実行できなくなっている。庭の花々を眺めたり、散歩するなどの気分転換は日常的に行っている。	利用者の身体機能の重度化や新型コロナウイルス感染防止のため、外出がほとんどできなくなっているが、職員と一緒に広い敷地内を毎日のように散歩をしている。職員によって植えられた花を眺めたり、季節ごとに変わりゆく山々やそば畑の景色の変化を肌で感じ、外の空気を共に楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理はご家族と事業所で行い、本人には現金は渡していない。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	以前は手紙の支援も行っていたが、現在は書く行為が難しくなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のホールからは、庭の草花や蕎麦畑を眺めることができ、鳥たちの姿や鳴き声も感じられる。テーブルや席の配置にも配慮している。隣の和室ではソファに腰掛けテレビを見られる場所となっている。	玄関から入った所に洗面台が設置され訪問者が入室前に手洗いができるようになっている。居間には高い天窓があり窓は大きく、開放感のある明るい空間である。居間続きの和室には大きなソファが置いてあり、利用者が横になったり洗濯物を畳んだりするスペースになっている。居間と廊下はすっきりと片付けられ、また床暖房なので冬場過ごしやすい空間になっている。壁には展示物がないが大きな窓から見える景色が絵のようである。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室とホールを自由に行き来し、横になったり雑誌を眺めたり、ぬり絵を楽しむことができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族やペットの写真を飾ったり、好きなぬいぐるみをベッドに置き一緒に眠っている方もいる。好みの物をのち込んで頂けるようご家族にもすすめている。	どの部屋も腰高の窓から開放感がある外の景色が眺められる清潔感のある明るい部屋となっており、部屋には洗面台が設置されている。ほとんどの利用者が身体の状態に合わせて各自介護用ベッドを使用している。入居時には利用者それぞれ好みの物を持ち込み、その人らしい居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの表示や居室のドアにネームをつけて分かりやすくしている。		